

いのちのバトン

島根県 松源寺 住職 佐瀬宏洋

今から12年前のことです。その電話は突然鳴りました。それは、妻の急変を知らせる、母からの電話でした。「いづみさんが、一時心肺停止で心臓マッサージをしてもらっているらしいから、すぐに病院に行ってください」。

急いで子どもたちに電話し、病院に駆けつけましたら、妻は救急車で大きな病院へ搬送となりました。その大きな病院へ向かう途中、受け入れの病院が替わり、隣の県に搬送されました。救急車ではただ祈るばかりでしたが、詳しいことを聞いていなかったので、恐ろしさで不安で一杯でした。

病院に着きMRI検査を受けたところ、なんと「くも膜下出血」でした。家族が呼ばれ説明を受けました。生命の維持に不可欠な脳幹の近くが破裂しているので「手術は出来ない、後、一週間の余命」と宣告されました。正に青天の霹靂です。

妻は、子ども達に対して常に全力投球で、妥協することがありませんでした。食事も手作りにこだわり、朝早くから台所に立ち、愛情を込める姿を見せてもらいました。長男が少年野球チームに入っ

た時から、経験のない野球を一生懸命に勉強し、独学でスコアも付けられるようになり、その後、長男と長女も野球チームに加わり、小学校から中学野球の試合まで、妻はほぼ全てベンチに入り、マネージャーとして世話をしてくれました。

疲れて家に帰っても家事を行い、晩御飯が終わるとぐったり休んでいる姿を、何回も見ました。子ども達の為に自分の命を削り、見返りを求めない慈愛の心で、いつも笑顔絶やさない妻の姿を、私は布施行だと感じました。

妻の死から、長い年月が流れ子ども達も成人しました。最近、娘たちがよくご飯を作ってくれます。「このおかずはよくお母さんが作ってくれたよね？こんな味だったよね？」と言いながら、お母さんの味とお母さんの笑顔を、娘たちが継承してくれています。私は、娘たちが知らず知らずのうちに、妻からのバトンを繋いでくれていたのだと感じ、嬉しくなりました。今年、十三回忌を迎えますが、妻の思いや心は、更に近い存在になっているような気がします。